

広島大学総合科学部報

飛翔

第 86 号



研究室紹介

総科で輝いている人

OB・OG 紹介

総合科学部 40 周年記念式典講演

食堂人気メニュー

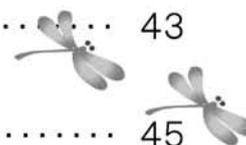
お好み焼き@広大周辺

広島大学
総合科学研究科・総合科学部
広報・出版委員会
飛翔編集委員会



<目次>

巻頭言	2
研究室紹介	5
◇ 社会探究領域	
◇ 人間探究領域	
◇ 自然探究領域	
食堂特集～総食の人気メニュー全て当てるまで帰れま 10	19
広島大学周辺お好み焼き MAP	23
輝いている人	26
OB・OG 紹介	33
総科 40 周年式典記念講演	37
レビュー×レビュー	40
飛翔な日々	43
編集後記	45



巻頭言

山崎 岳

(総合科学研究科副研究科長)

「研究は世の為人の為？」



総科一年生の講義「総合科学へのいざない」では、グループごとに意見を集約します。大学での学び、がテーマの回は、「高校までは自分の為に学んできたが、大学では将来ヒトの役に立てるようになる為に学ぶ」という意見が複数出され、正直、えらいなーと思いました。振り返ると、私は「ヒトの役に立つことを目指さない研究」を極める為に学んできました。

わりと早くから研究者、化学者になりたいと思っていた私にとって、憧れの化学者は、ヘンリー キャンベンディッシュ(一七三一〜一八一〇)です。中一のころに角川文庫の「空気の発見」で出会ったキャンベンディッシュは、アルゴンの発見、金属と酸による水素の発生、水素と酸素が反応すると水ができることなどを報告し、地球の比重を計測した業績で知られるイギリス貴族です。大変な人嫌いで、大学などに属せず、自分の別荘で少数の助手と私財で研究を行いました。論文

として発表したのは研究結果の一部だけで、死後のノートからは、独自にクーロンの法則を発見し、シャルルの法則は発表される二十年以上前、オームの法則はオームの四十六年前に発見していたことが読み取れます。彼にちなんで設立されたケンブリッジ大学のキャンベンディッシュ研究所は、ROYAL の研究など二十八人のノーベル賞学者を輩出しています。彼は、地位や名誉、お金のためではなく、自分の「趣味」として好きなテーマを研究し、自分で納得の行った内容だけを論文にする、ということを買いたようでした(人嫌いのため記録が少なく、本心は伝わっていませんが)。もちろん、研究を實行できるだけの財産を持っていたこと、産業革命以前で、科学と産業の関連はまだ希薄だったことなどが背景にあります。自分の好きな研究だけを何にも束縛されずに行える、という状況に大変憧れをいだきました。わが身は逆立ちしてもそのような境遇にはなれないことはわかっていましたから、せめて

研究内容だけは、金儲け、すなわちヒトの役に立つことは目指さない、と心に決めました。

そういう立ち位置では、受験の時、理学部以外は考えられません。理系の他学部（工、農、医、薬等）では、ヒトの役に立つことを目指さなくてはならなくなります。残念ながら、当時は総合科学部の事は知りませんでした。

出身大学では、役に立たない路線をおおむね貫くことができて、土壌微生物の生化学で学位を取りました。広大総科で職を得たときに、環境科学コースに所属したにも関わらず、なぜか動物のホルモンの研究がテーマとなりました。これはもしかしてヒトの役に立ってしまうのではないかと、かなりの危機感を覚えました。当時の上司の小南先生（名誉教授、故人）が、「金儲けにつながる研究はヤランときこうな。（製薬）会社からむとメンドクサくてかなわん」とおっしゃったので、大変安堵致しました。会社から共同研究の申し入れがあったりしまし

たが、幸い、未だ大事には至っておりません。

そうは言っても、理系の研究にはお金がかかります。税金や民間由来のいわゆる外部資金の研究費が必須です。最近の外部資金の申請では「この研究はどのような役に立つか」が重視されるので、心苦しい思いをしながら、意に反する申請書を書かねばなりません。そういうしているうちに、広島大学がすばらしいスローガンをかけてくれました。『学問は最高の遊びである』。私にとって、学問とは研究を遂行するために修めるものですので、このスローガンは、「研究は最高の遊びである」と読み替えることができます。おかげで、それまで口にするのがはばかられた「得られた研究費で実施する研究は、役に立つことを目指していない」という本心を、学内でなら曝露してもいいかな、という気分になりました。念の為に申しておきますが、私の研究は、当該学問分野の発展に寄与し、さらに学生が卒業後に世の為人の為に役

立つ人物になるよう、十分な研究能力を身に付けさせるために遂行しており、決して自分の遊びや趣味のために無駄に行っているわけではありません。

ところで、私のモットーは、役に立たない研究をすることではなく、「ヒトの役に立つことを目指さない研究」をすることです。その意図は、図らずもアメリカウイスコンシン大学教授だったハワード M テミン氏（一九三四～一九九四、一九七五年ノーベル医学・生理学賞）が代弁（？）してくれています。私は一九九一年、ウイスコンシン大学で研究しておりました。当時の大学新聞にテミン氏のインタビュー記事が載っていて、エイズの原因ウイルスなどが持つ逆転写酵素の発見者として、コメントを寄せていました。「私はニワトリのラウス肉腫ウイルスを詳細に研究し、逆転写酵素を発見しました。その時はこのような形でエイズのようなヒトの病気の治療に関連するとは予想もしませんでした。レベルの

高い研究は、研究している時点ではそうは見えなくても、必ずヒトの役に立つものですよ。」

そう、私が「ヒトの役に立つことを目指さない研究」を志すのは、腹黒い願望があるからです。私の研究の質をどんどん高めれば、将来全く予想もしない形で世の為人の為に役に立つ日がくるかもしれないと、密かに願っているのです。総科の一年生をえらいなーと思ったのは、彼らは素直に「人の役に立ちたい」と発言したからです。心の底では似た思いでも「役に立つことを目指さない」と公言している私は、多分にひねくれ者です。私の研究のレベルは、「予想外に役に立つ」という域にはまだ達していないように思えます。しかし、将来何がおこるかわかりません。特に総科のように学際的な刺激の多いところではなおさらです。目の前の研究を、キャンベディッシュにあやかっただけの変な野望を持たずに精一杯遂行し、もっばらそのレベルを高める

こと、その過程で学生たちを十分に教育すること、それが今後も私の本望です。

